



## 産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

2016年11月号

Vol. 7

### 「ありがとう！」～支援で助かった命～

(ケニア・ガルバチュウラ県)

ケニア地域保健強化事業(通称IHOP<sup>\*1</sup>)では、住民の中から選ばれた地域保健ボランティアを育成して、住民を対象とした健康教育や対話集会を開催することにより、地域住民の健康に対する知識や意識を向上し、住民自身が自らの健康を守ることができるようなシステムを作り上げようとしています。

事業地ガルバチュウラ県のコンボラ村で、子どもたちが無邪気に遊ぶ様子を幸せそうに眺めるチュクリサ・ローバさん(30才)は6児の母親です。

双子を身ごもって7ヶ月目が過ぎたある日、彼女は下腹部の出血を伴う激しい腹痛に襲われました。ローバさんの相談をうけたIHOPの地域保健ボランティアは、妊娠中の出血を伴う腹痛は非常に危険な兆候であり、設備や人員の整った医療施設への緊急搬送が必要であると判断しました。

彼女が住むコンボラ村には医療施設がなく、この地域では救急搬送のシステムも整っていません。

ボランティアからの連絡をうけたケニア赤十字社のIHOPチームは、急いで車両を手配し、村から150km離れた病院まで搬送しました。

病院の救急外来で、彼女は無事に双子を出産することができました。保育器の中で、子どもたちが十分に成長するまでの期間は、とても長いものでしたが、2ヵ月後、元気に育った子どもたちを連れて、夫や家族の待つコンボラ村まで帰ることができました。

「命を落としかけたあの恐ろしい経験を忘れることができません」。IHOPの巡回診療を利用して予防接種を済ませた子どもたちの傍で、ローバさんは語ります。「赤十字は、ガルバチュウラのような恵まれない地域で、人々に寄り添い、命を救い続けています。日赤とケニア赤十字社には感謝してもしきれません」。

彼女は今、IHOPの地域保健ボランティアとして活躍しています。IHOPの研修で学んだ知識や技術を用いて、村人に対する保健教育活動を行い、地域の保健状態の改善に重要な役割を果たしています。



### 「産休サンキュープロジェクト」とは

出産を機に、生まれたいのちと支えてくれる周囲の人に感謝し、日本で産休・育休を推進し、寄付によって開発途上国の子どもとお母さんを支援し、一緒に子どもたちを育てていくプロジェクトです。

毎年4月・11月に発行されるニュースレターでは、ご支援いただいている事業報告のほか、親として共感できるような出産・育児の話、子どもを取り巻く保健リスク、日本での子育ての知識/子どものケガの手当と予防/疾病予防等を紹介していきます。

社内外のプロジェクト支援者への配布や、社内報等での啓発、あるいは貴社・貴団体のCSR活動報告等にご活用ください。



数日前から咳が止まらなくなった子供を連れて受診した女性(中央)、事業を指揮するケニア赤十字社職員(右)、事業を視察する大阪赤十字病院の喜田たろう職員(左)

\*1 IHOP: 「Integrated Health Outreach Project」の略。本事業は、2007年から2017年の10年間の事業で、ケニア北東部に位置するガルバチュウラ県の村々の母子保健を中心に保健分野を支援しています。

## 「現地のほっこり話やびっくり話」

～皆様からいただいたご質問・ご要望にお応えして～



### 人々の行動を変える“マグネットシアター”

IHOP事業地のガルバチュウラ県は、ケニア国内のなかでも、とりわけ妊産婦死亡率、新生児死亡率、乳幼児死亡率が高く、また保健医療施設へのアクセスの悪さ、医療従事者の介助のない出産、低い予防接種率など、多くの保健医療に関わる課題を抱えていました。

IHOP事業の開始後、保健指標の多くが改善傾向を示してはいるものの、地域社会の伝統的な価値観が、住民の行動変容の障害となっています。このためIHOPが推進する家族計画への理解はなかなか浸透せず、また多くの妊産婦が、技術や設備の整った医療施設での安全な出産よりも、伝統的産婆の介助による自宅での出産を選択しています。このような状況を改善するために、今年度から“マグネットシアター”活動が開始されました。



マグネットシアターを囲む住民たち



授業が終わりマグネットシアターに駆け寄る女子学生



歌や演劇を通じて学ぶ住民たち



広場でマグネットシアターの準備をするIHOPチーム

“磁石のように人々を惹きつける”という意味をこめて名づけられたこの活動では、「病気になった妻が病院に行こうとするのは、誤った行動なのか？」「妻に暴力をふるうことは正しい行いなのか？」など、地域社会が抱える敏感なテーマについて、ボランティアが歌や演劇を通じて問いかけ、住民の行動変容を促していきます。

今年の6月、初めての公演が、イスラム教徒が多く住むイレサボル村で開催されました。

この時期はイスラム教の断食月にあたるため、IHOPチームもボランティア達も、どれくらいの村人が参加してくれるのか不安を抱えながら準備をしていました。

しかし音響機器を使って音楽を流し始めた途端、徐々に村人たちが集まりはじめ、学校での授業が終わった子どもたちも加わって、最終的には160人近い聴衆が集まりました。

## 地域の未来を育てる“赤十字クラブ”

地域の将来を担う若者に対して健康教育を行い、彼らをコミュニティでの行動変容の担い手とする試みも始まっています。ケニア赤十字社は、県内17カ所の小中学校に青少年赤十字クラブを設立し、課外活動として保健を含むさまざまな授業を開始しました。

孤児が多く通うサイドファティマ小学校にも赤十字クラブが設立され、30人の生徒が入会しました。

赤十字クラブで指導を行うケニア赤十字社のシアードさんは、地元ガルバチュウラ県の出身で、かつてはボランティアとしてIHOPの巡回診療に参加していました。

「子どもたちは私たちの未来です。彼らが住民の行動変容の担い手となり、いずれIHOPや赤十字を支える協力者になってくれたらうれしいです」と語ります。



赤十字クラブで指導をするケニア赤十字社のシアード職員(左)と子どもたち

## 砂漠のオアシスのような存在 “巡回診療”

事業地のガルバチュウラ県は、同国北東部に位置しており、広大な半乾燥地帯に集落が点在する地域です。政府の保健医療サービスはこの地域までは十分に届いていないため、本事業では地方自治体と協力して、医療施設のない僻地の村々に医師や看護師などの医療スタッフを派遣し、巡回診療を行っています。

月に一度実施されるこの巡回診療では、IHOPの職員が地域の県立病院の職員と寝食を共にしながら、1週間かけて僻地を巡ります。

人口約1,000人のコンボラ村では、土壁でできた小学校の教室の一部を使って、ケニア赤十字社の診療所が開設され、ケニア人の医療スタッフによる診療活動が行なわれました。

地域保健ボランティアとして巡回診療を手伝うアミナさんは、「IHOPが村で行っていた健康教育に参加してから、出産や予防接種など保健に関する事柄に興味を持つようになりました。これからもIHOPのボランティア活動を続けていきたいです」と語りました。

この日の診療には、産前産後健診や乳児健診を含めて、100人近い住民が訪れ、医師による診察、マラリアなどの血液検査、身体測定や栄養状態の評価、投薬や予防接種、補助栄養食品の提供など、さまざまな保健医療サービスが提供されました。

子どもの予防接種に訪れた女性は、「事業が開始される前は、病気になったら、診療所のある隣村まで何時間もかけて行かなければなりませんでした。私たちにとってIHOPは砂漠のオアシスのような存在です」と語りました。

ケニア赤十字社のIHOP事業への日赤の支援は2017年12月に終了し、その後は同県保健省に活動が移管される予定です。地域住民の健康への意識がさらに高まり、事業終了後も良質な保健医療サービスが継続されるよう、赤十字は地域住民や政府への働きかけを続けます。



巡回診療を手伝う地域保健ボランティアのアミナさん(右)



巡回診療の資機材を車両に積み込むボランティア

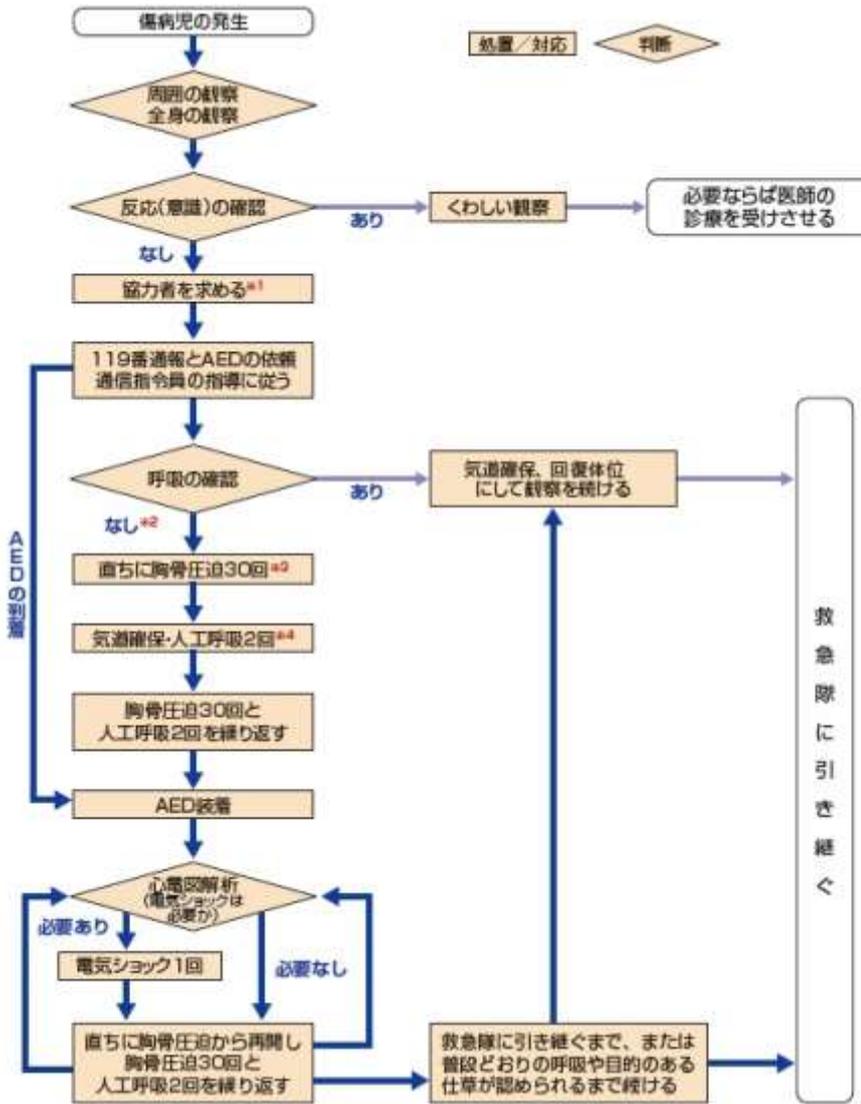
# 「幼い命を救うために知っておきたいこと」

## ～乳幼児の一次救命処置について～

日本における子どもの死因では、「不慮の事故」が上位を占めており、乳幼児期は一生の中で最も事故を起こしやすい年齢層です。もし、不幸にして事故などが起こっても、適切な手当を素早く行くと、命を守り、また傷病の悪化を防ぐことができます。手当の正しい知識と技術を学び、万一の場合に備えて対応できるようにしておくことが大切です。



### 一次救命処置をフローチャートで確認しましょう！



こんな時には急いで手当を!!!

反応(意識)がない  
呼吸が止まっている  
心臓が止まっている



生命にかかわる状態のときは、発見した人が直ちに手当できるようにしましょう。

一次救命処置は、こどもを  
■1歳未満の乳児  
■1歳以上6歳未満の幼児  
に分類し、それぞれに合った方法で手当をする。

★「赤十字WEB CROSS電子講習室」をご活用ください。日赤WEBCROSSで検索するか、こちらのQRコードから開いてください（スマホ対応）。



【情報提供: 日本赤十字社東京都支部】

日本赤十字社東京都支部では、一次救命処置をはじめ、子どもの成長・発達と病気や事故予防に関する講習を行っています。お子様同伴で受講していただける2時間ほどの短期講習等もごございます。詳しくはホームページをご覧ください。

東京 赤十字

検索

- ※1 協力者がいない場合は、救助者が119番通報し、すぐ近くにあればAEDを準備する
- ※2 死戦期呼吸または判断に自信が持てないときは胸骨圧迫を開始する
- ※3 強く(胸の厚さの約1/3)・速く(100~120回/分)・絶え間なく(中断を最小限に)
- ※4 人工呼吸の技術と意思があれば行うが、できない状況では胸骨圧迫のみを行う

産休サンキュープロジェクトに関するご意見・ご要望をお寄せください。特に、ニュースレターの内容については、参加企業・団体の皆様とのコミュニケーションツールとなりますので、ご提供いただける情報、どのような情報がお知りになりたいか、素朴な疑問からご感想まで、是非、皆様の声をお聞かせください。

また、ニュースレターのデータ配信をご希望される方もこちらまでご連絡ください。

日本赤十字社 国際部 開発協力課 産休サンキュープロジェクト担当

電話: 03-3437-7089

Eメール: [sankyuthankyou@jrc.or.jp](mailto:sankyuthankyou@jrc.or.jp)

